

青森県立高等学校魅力づくり検討会議東青地区部会（第2回）概要

日時：令和5年12月20日（水）

9：30～12：00

場所：青森商業高等学校 会議室

<出席者>

東青地区部会委員

前田 済 地区部会長、工藤 裕司 地区部会副会長、今別 幸司 委員、
小田桐 世長 委員、賀田 州一 委員、斉藤 雅美 委員

1 開会

外崎高等学校教育改革推進室長から挨拶があった。

2 事務局説明

地区部会における検討の進め方について

事務局から、資料2及び資料2の附属資料について説明した。

3 意見交換

地区部会における検討の進め方について学校・学科の充実の方向性（整理案）【たたき台】について

事務局から、押さえておくべき基本的な事項等として、これまでの会議資料について説明した。

<これまでの会議資料>

- ・7/7 検討会議（第2回）資料4「学校・学科・教育制度等の現状」
- ・8/7 第1分科会（第2回）資料4 附属資料①「各校のグランドデザイン」
資料4 附属資料②「各校の教育活動の状況」
- ・10/5 第1分科会（第4回）資料2「高等学校教育に関する意識調査（速報）」

I 魅力ある高等学校づくりに向けた基本的な考え方

事務局から、資料3の全体構成と、「1 検討に当たっての視点」、「2 求められる力と人財像」及び「3 県立高等学校教育の方向性」について説明した。

委員から次のような意見があった。

（検討に当たっての視点）

- どれも納得できる意見であるが、社会が急速にかつ、大きく変化している中、それに対応するだけでなく、さらにその先を予測するような視点が必要ではないか。

- 時代の変化に対応することは大切なことではあるが、それだけでは後手になってしまう。変化の激しい時代においては、諦めずに自分で考えていける主体性を持った人財を育てるべきである。そのような人財を育成するには、自分で考えて行動し、失敗しても乗り越える経験をとおして自信を持たせるような教育活動が大事である。具体的には、現在、各校で取り組んでいる「あおり創造学」等の探究活動における協働や学校設定科目の設定などが考えられる。また、それらの取組は各校の特色化にもつながる。
- グローバル化や情報化といった要素が不足している。これらは欠かすことができない視点である。
- 教育振興基本計画では、生徒のウェルビーイングの向上だけでなく、社会の担い手の育成の視点も挙げられているため、グローバルな人財だけでなく、地域社会の担い手の育成等の視点も必要である。
- これまで、社会から学校に対する期待として、進学の部分が大きかった。しかし、進学等の特色を持つことはよいことではあるものの、従来のような座学による学習をとおして進学を推進しても、高校3年間だけの視点で人財育成をすることになるため、社会の学校や教育に対する意識の変容が必要と考える。

II これからの時代に求められる学科等の充実

事務局から、資料3「1 全日制課程 (1) 普通科等」について説明した。

委員から次のような意見があった。

(普通科)

- 特別活動等の人間性の向上の部分以外であれば、普通科は世界中どこにいても学べるのではないか。
- 最近、高い学力を持った子どもたちが県外の高校へ進学しており、青森県の普通科が高い資質を持った子たちの能力を最大限に引き出せていないからではないか。このため、高いレベルの理数教育やグローバル教育を行う学校として、国の指定を受けるだけでなく、本県独自に50人程度の少数精鋭で高いレベルの教育を行うような特色を持った学校をつくってもよいと思う。
このような学校で学び、県外へ行ったとしても、最終的には青森県に戻り、本県や日本、世界をリードする人財を育成するといった視点があってもよいと考える。
- 私立高校ではスポーツや学科の学び等による特色化が進められ、結果として志願者を増やしている。県立高校の普通科においても、目的を持って進学してもらえらるような特色を見つけることが重要である。

- 青森県の高校に魅力を感じず県外に進学したり、将来関東の大学に進学したりするため、高校段階から関東へ行った方がよいと考えたりする保護者・生徒が増えているため、特色化が非常に重要である。普通科だから特色がないのではなく、普通科だからこそ特色を持ったり、社会と触れる機会を増やしたりしないと勝ち残っていけない。

(外国語・グローバル探究科)

- グローバル探究科は文系にも理系にも進学できるカリキュラムを編成しているほか、英語をツールとしてコミュニケーションできるような国際的な人財を育成する学科である。このような学びができる学科が1学級しか募集できないのは残念である。
- グローバル探究科では、探究活動を重視しており、通常の倍以上の時間を設定している。様々なテーマの下、インタビュー等の調査により、仮説を検証したり、結果をまとめたりする。このような活動をとおして、生徒は目に見えて大きく変化する。
新たな時代に対応するためには、ペーパーテストで点数を取るだけでは通用せず、自ら交渉する経験や励まし合いながら協働する経験などが非常に大切であり、グローバル探究科はこれらの経験ができる非常によい学科である。
- 私立高校の英語科ではネイティブの教員が数多く配置されるなど、特色化が図られており、県立高校においても特色化を進め、魅力を高めたほうがよい。

(スポーツ科学科)

- 以前は、スポーツ科学科が設置されている高校に全国大会出場レベルの運動部があったが、学校によっては、最近そのような話を聞かなくなった。特色の一つとして、その学校に進学すれば、魅力ある競技ができたり、全国大会に出場できたりすれば、魅力となると考える。

(表現科)

- 表現科において、表現や演劇、舞台芸術等に関する学習が行われているとのことだが、芸術に関する本県の現状として、5つの美術館が設置されており、その5館が連携しイベント等を行っている。また、青森市ではねぶたアート等のアートに関する取組が進められようとしている。これらを踏まえ、青森戸山高校の美術科がなくなった状況ではあるものの、県内の美術館で働く人財を地元で育成したり、美術が好きな子どもたちを本県に呼び込んだりすべき。また、美術館が5つもある地方都市は少なく、その特長を生かすべき。

事務局から、資料3「1 全日制課程 (2) 職業教育を主とする専門学科」と「(3) 総合学科」について説明した。

委員から次のような意見があった。

(農業科)

- 農業高校に視察に行ったが、作物に関する学びや実習だけを行っているイメージであったが、実際は6次産業化への対応や、作物を輸出することに関する学びが行われていてとても驚いた。その中で、NPOと連携して子ども食堂に参加したり、フードロスについて学んだりしており、生徒が生き生きと学び、とても楽しそうに見えた。農業の学びに魅力を感じ、遠方から通っている生徒もいるとのことだった。農業科だけでなく、工業科や商業科も特色を出しやすいと思うので、子どもたちが分かりやすい特色を打ち出していければよい。
- 以前視察に行った農業高校の生徒はプレゼンテーション能力が高く、内容もSDGsについてなど、グローバルな学びを行っていた。また、大学進学する生徒も一定数いるとのことだった。小・中学校でキャリア教育を行っているものの、高校進学時にどの職業に就くかのイメージを固めることは難しく、進学の道があることや、地元就職先があるといった卒業後の選択肢があることが伝われば、子どもたちにとって、普通科だけでなく職業学科に進むといった選択肢も増える。

(商業科)

- 簿記やそろばんについて学んでいた昔の商業高校と比べると、現在は台湾との連携等グローバル化に対応した学びを行うなど、非常に学習内容が発展しており、時代に合わせた変化は大事である。

(水産科)

- 青森市のホタテ養殖業者の多くが被害にあったほか、青森市以外でも陸奥湾における水産業の話題が多く取り上げられているにもかかわらず、東青地区に水産業に関する学科がないのが残念である。水産業に関する課題を解決するための人財を育成する場がないことは不安である。

(看護科)

- 中学生は、県立高校の看護科を志望する場合、黒石高校への進学しか選択肢がない。県立中央病院と青森市民病院の統合により、医療の面でも青森市が中心になっていく動きがある中、新設される病院の近くに看護科や、薬学系の大学進学を見据えた学科を有する高校を配置してもよいと考える。

(その他(職業教育に関する学科))

- 保護者からすると、学校の紹介の内容が難しくて分かりにくい。各高校が学校紹介のために中学校を訪問していると思うが、子どもたちが理解できているか疑問である。職業学科は、もっと学科に関する学びに特化し、その特色や楽しさをかみ砕いて分かりやすく説明すべき。
- 高校でもコミュニティ・スクールの導入が進められている段階だと思うが、特に職業学科を有する高校においては、スクール・ミッションやスクール・ポリシーの実現に協力してくれる人材に学校運営協議会に入ってもらい、教育活動を後押ししてもらいたい。

(その他(全学科をとおして))

- 統合により普通科と農業科が併置されている高校に勤めていたが、普通科と農業科と一緒に田植えをしたり、運動会に農業を取り入れたりしているほか、普通科が専門教育や施設を生かした探究活動を行うなど、とても特色があった。そういった特色を他校にもモデルとして示すことができれば、工業科ではものづくりを生かした特色など、各学科の特色化につながる可能性がある。

事務局から、資料3「**2 定時制課程**」及び「**3 通信制課程**」について説明した。

委員から次のような意見があった。

(定時制課程)

- 現状として、不登校経験や発達障害のある生徒も在籍していると思うが、これからは自分らしく学びたいとの理由で定時制課程を選択する生徒もおり、もっとフレキシブルに学べることをPRしてもよいと考える。
- 定時制課程は昔とイメージがかなり変わってきているにもかかわらず、保護者には何か問題のある生徒が通う課程とのイメージがついてしまっている。これでは、働きながら学びたいという志望を持った子どもの居場所がなくなると思う。
- 病気を患い全日制課程で進級できなかったが、定時制課程の高校に入学し直し、公立大学に進学することができた生徒がいた。定時制課程の先生方は一人一人に合う指導を見極め実践しており、とても苦労されていると思う。

- 定時制課程に進学する動機としては、進学に向けて予備校で勉強するためや、学校行事が嫌だから、学び方が自分に合うからなど、様々なものがある。それに伴い、中には基礎学力が身に付いていない生徒から、進学したい生徒まで幅広く在籍しているが、先生方は生徒に合わせてきめ細かな指導を行っている。
- 北斗高校には、職業学科が設置されていないが、職業に触れる機会や、他者とのつながりを創出するため、工業高校や商業高校の生徒との交流があってもよいと考える。
- 定時制課程で自分の壁を克服していく上で、編入等により、新たな環境で学べるような機会も提供できればよい。
- 以前、定時制課程の校長の話を聞いて、様々な事情により中学校まで登校できていなかった生徒の学びを義務教育段階において保障できていたかどうか考えさせられた。中学校までは半分程度しか登校できていなかったが定時制課程で皆勤賞となった生徒もいる。また、サタデースクール等の様々な方法で不登校経験がある生徒の活躍の場をつくっている。これらのように、定時制課程では様々な事情を抱えた生徒を受け入れ、個別に対応しており、行政など、様々な立場の人が定時制・通信制課程をバックアップし、教育を充実させていけば、多様な学びの提供が実現されると考える。

(通信制課程)

- 下北地区の生徒は通信制課程に進学するのであれば北斗高校となるが、大間町から北斗高校に進学した生徒はスクーリングの際、かなりの時間を要していた。当然、ICTを活用することも考えられるが、対面で授業を受けるのであれば、北斗高校に月1回だけ通い、残りは田名部高校でスクーリングができるようにすることで通学しやすくなり、中学生にとっても進学先の選択肢が増える。
通信制課程については、学び方の自由度が高いことを生かすことで、もっと特色が出せると考える。

Ⅲ 多様な教育制度

事務局から、資料3「1 中高一貫教育」、「2 全日制普通科単位制」及び「3 総合選択制」について説明した。

委員から次のような意見があった。

(中高一貫教育)

○ これまで、本県では青森・弘前・八戸の3地区でバランスよく取組を進めてきている。中高一貫教育校についても、新たな設置には課題があるかもしれないが、この3地区に配置してもよいのではないか。なお、青森高校・弘前高校・八戸高校にこだわる必要はない。また、既に十和田市に配置されているので、八戸地区には配置されているものと考えられることができるかもしれない。

青森市に中高一貫教育校が配置されることで、他の中学校の刺激にもなってよいと考える。拡充した場合の課題として、指導力の高い教員が中高一貫教育校にだけ集まるとの懸念が記載されているが、そうなるとは限らない。

○ 中学校・高校の間には壁があるように感じるが、中高一貫教育は中学生が普段から高校の様子が分かるためギャップが生じなくて非常によい。全ての学校が中高一貫教育校である必要はないが、配置されることで、他の中学校・高校が刺激を受けたり、よい部分を取り入れたりして、中高のスムーズな接続につながると思うが、入学後のミスマッチを抱えた生徒に対する手当があるか気に掛かる。

Ⅳ 各校の特色ある教育活動の充実に向けた取組等

事務局から、資料3「1 特色化の推進」、「2 多様な主体との連携の推進」及び「3 小規模校における教育活動」について説明した。

委員から次のような意見があった。

(ICTの活用による教育環境の充実)

○ 実際に学校に登校せずとも、学ぶ機会や場を保障してあげるのが我々の務めである。例えば、青森市では事情があって登校できない生徒に対し、全ての授業をオンライン配信したり、AI型ドリル等を活用したりして、自宅で学習できるようにした。このように手法を模索しながらも、少しずつICTの活用を進めてきている。

- 青森市の小・中学校では、先生方の努力もあり、コロナ禍においても遠隔授業を行いながら乗り切ることができた。全国学力・学習状況調査の結果を見ると、ICT機器を授業で活用している割合の全国平均が3割程度である中、青森市は7割程度となっている。これらのことから、青森市の中学校の生徒は情報端末等を活用した学習に慣れており、その特長を生かすべき。

ICTについては、教員が対応できていない現状があるが、青森市内の小・中学校では、AI型ドリル教材の活用などについて検討していくので、高校においてもICTの活用を進めてほしい。

- 情報端末を活用しながら有名予備校講師の授業を受けるなど、高校でもICTを活用した取組が進められることで、小・中学校と高校間でのICTの活用の状況の差は埋まっていくものとする。

(特別支援教育等の推進)

- 特別支援学校との連携は、現在、最も求められていることである。特別支援学校での採用を増やし、人事交流により、全県の小・中学校や高校に配置することで、質の高い教育を実現させてほしい。

特別支援教育の専門性を持った人材は、どこでも求められている。現状として、小・中学校に発達障害のある子どもたちが在籍しているにもかかわらず、専門性を有した人材が配置されておらず困っている。

- 特別な支援を必要とする生徒が増えているため、研修等により教員の指導力を向上させることが非常に重要である。

(小・中学校との連携)

- 高校と小・中学校との連携によって、小・中学生の学校への理解も進むだろう。また、小学生のうちからこの高校に行きたいという思いを育むことは重要である。現在、小・中学生が将来像を描けるよう、様々な団体や学校等において、職業についての学びを行っており、その学びをさらに深めるためにも小・中・高校の連携は有効である。特に、専門高校との連携は、職業観の醸成にもつながるため、進めていってほしい。

(地域・関係機関等との連携)

- 高校に求められることの全てを実現しようとする、高校の中だけでは完結しない。その実現に向けた方策として、地域の様々な団体や産業界等との連携に関する意見が出されているが、地域課題に取り組むNPOなどとの連携により、さらに教育活動の幅が広がると考える。ただし、教員の多忙の状況を踏まえると、新しい連携を構築することは難しいと思うため、学校ごとにコーディネーターのような人材がいれば連携がさらに広がると考える。

- 関係機関との連携については、全学科共通して必要な考え方であるため、共通性と学科ごとの独自性を踏まえて記載できればよい。
- 子どもたちは教員以外の大人と活動することで、職業観も醸成されるため、企業やNPOとの意見交換をとおして、教育活動を充実させられたらよい。これからは、学校を社会に開いて様々な方との交流ができればよい。
- 大学の授業のフィールドワークにおいて、学生と一緒にボランティアを行うことがあるが、大学で初めてボランティアを経験する学生がとても多い。また、新聞を読んだことのない学生もいるなど、社会と接する経験を持たないまま大学生となっているように感じる。
小・中学生と接するボランティア活動に学生を連れていくと、とても楽しそうに取り組んでおり、もっと早い段階でこのような経験できていれば、進学や就職に際しても、もっと広い視野で考えることができるため、教育活動全般において、小・中学生との交流のほか、地域の団体や企業との連携が必要と考える。

V 第2分科会での検討における留意事項等

委員から次のような意見があった。

- 東青地区において、職業学科や総合学科の配置は妥当だと思う。
- 私立高校では遠方であっても、スクールバスで送迎しているが、県立高校にはスクールバスがないため、遠方からでも自力で通学しなければならない。青森市で高校を選んだ理由を調査した結果、近いからとの理由がほとんどであった。
これらを踏まえると、県立高校が特色を打ち出したとしても、遠いことを理由として進学を断念する生徒が多くなると考える。また、大学と連携・交流するといっても、大学は郊外にあることが多いため、交通面の整備は重要だと考える。
交通面の整備が難しいのであれば、遠くても通いたくなるような強烈な特色を打ち出さなければならない。
- 浪岡地区には5つの小学校があるが、それぞれの学校で活動しているスポーツクラブの競技が異なるため、希望する競技に参加するためには移動が伴い、その移動の負担を減らすため、バスを運行している。このような要望に応じたバスの運行を県立高校にも導入することで、通学環境によらず、本当に行きたい高校に進学できるようになると考える。
- 将来的に普通高校と特別支援学校の統合があってもよいのではないかと考える。障害を持つ生徒と持たない生徒を分けて教育活動を行うことは人権侵害だと考える国もある。また、生徒の高校進学の実選択の幅が広がったり、教員が相互に乗り入れたりするなどのメリットもある。

(その他(全体をとおして))

- 全体的に、広く県民に分かってもらえるよう、もう少し分かりやすい言葉にしたり、説明を加えたりすべき。

部会長から、東青地区部会の委員構成について、追加の必要の有無等を確認したが、委員からの意見はなかった。

3 閉会